

進路指導の真面目な話があったからか、今日は会話が少ない。

「シコシコするしかねえな」

いつも通りの下校途中にそんな言葉を聞いてしまい、なんの声も上げなかったわたしを誰か褒めて欲しい。だけど谷田は同意をもとめてきた。さも、なんでもないように。

「な、そう思わん？」

「な、なに言ってるの?! じょつ、女子にそんなこと言うなんて……ッ信じられない!」

卑猥な話を振られたと思い、つい叫ぶように言ってしまった。谷田は口をすぼめて眉を上げ、驚いていた。弁解することもなく、困ったように再び問いかけてきた。

「待て待て、お前なんか勘違いしとらん？」

「は？ 何が？」

「……『シコシコ』っていうのはコツコツって意味だぞ」

つり上がっていた眉が下がり、また感情の熱も急激に下がるのが自分でもわかった。

「受験、無事受かろうと思ったたらコツコツやるしかねえな、って」

意味で言ったんだけど、という言葉聞いてはいたけど、恥ずかしさで頭がいっぱいになるわたしにはまったく理解できなかった。

勘違いで怒り、怒鳴ってしまったことと、真面目な言葉を猥褻な意味で捉えてしまったことを、わたしはひどく恥ずかしく思った。

「まあ、そういうときもあるわな」

不器用なフォローはわたしの羞恥心をすこしも持って行ってはくれなかった。だけど、彼はからかうこともせずになだ黙って一緒に歩いてくれた。

「T高だろ？」

わたしの家がある通りに入ったところでぼつりと訊かれた。

「え？」

「第一志望」と最低限の補足が最低限の言葉で付け加えられる。

そうだけど、と顔を上げて答える。

「俺もだ」

「互いに受ければまた一緒にいられる」

谷田はそう言った途端に、少し歩く歩幅を広くした。

わたしの斜め前を歩く形になり、彼の顔が見えなくなる。だけど、見間違いじゃなければ彼の耳は赤々と染まっていた。日の長いこの時期、夕景が見れるのはまだもう少し先の時間で、空は東西に渡って蒼い。

わたしはしずかに近寄り、しゅばつと前に躍り出る。羞恥心を忘れ、彼の顔を正面から捉えると、やっぱり彼の顔は赤くなっていた。わたしは勘違いを恐れずに好意の在りかを訊ねた。